「国語の力」の成立過程 IV

——国語教育学説史研究——

野地潤家

八

「国語の力」の成立過程において、「ヒューイ」と並んで、一つの重要な役割を担ったのは、「モウルトン」である。その所説に負うことのすくなくないことについては、すでに垣内先生みずから、「国語の力」の「序」に述べられている。

モウルトン（Richard Green Moulton）（1849—1924）は、アメリカ（イギリス生まれ）の文学者で、イギリスの神学者・聖書学者であったWilliam Fiddian Moulton（1835—1898）の弟にあたる。一八九二年、シカゴ大学の教授となり、のち、一九〇一年から一九年まで、シカゴ大学文学部長を勤めた。

主著には、

○ Shakespeare as a dramatic artist, 1885
○ The modern reader's Bible, 1895—1923
○ The moral system of Shakespeare, 1903
○ World literature, 1911
○ The modern study of literature, 1915

などがある。（「岩波西洋人名辞典」、昭和31年10月16日、岩波書店刊、一五五〇ページによる。）

モウルトンとの交渉について、垣内先生みずからは、つぎのように述べられている。

「その頃耽読したモウルトンの『文学の近代的研究』（本多顕彰氏訳岩波書店発行）の訳出されたこともなつかしく思う。モウルトンの研究を広く世に薦めたのは、その著わされた一九一五年より数年に亘って居る。その頃はよく講義に於ても、文章の中にも、それを問題的に取扱ったのであるが、その批判には目もくれないで、若い人たちから、その名を自分の綽名として用いられたことも、今は憶出の一つとして微苦笑される。

モウルトンに遠ざかったのは、クローチエのエンスリー訳が読まれた頃であるから、余り長い間ではなかったように思うが、その後までも手を離さなかった。クローチエから東洋的な考方の方へ転回し、本来の方向を取戻してからは全く別の方向を採って今に至って居るが、今この訳書を手にして、その頃のいらいらした心もちを追懐することが或るなつかしさを誘うのも、一にモウルトンの篤実温厚な学風を景仰した印象の深かった為であろう。

この訳書の出ずる前に、その文学形態論（芦田正喜氏訳）だけは読まれて居るのであるが、その解釈学に関する部分は一般には読ま

れて居なかったかも知れぬ。われわれが今も興味を持つのは、文学理論の方面よりもその解釈学的立場である。この訳書に依りて、この方面が一層よく知れわたるようになったら、われわれが長い年月の間、関与して居る問題が一層明かに問題的になされるであろうことを想って悦びに堪えない。そのことが今日から始められるとしても、決して遅過ぎるということはない。」（雑誌「国文学誌」第二巻第一二号、昭和7年12月1日、不老閣書房刊、「解釈学片影（四）」四～五ページ）

右に示されている、モウルトン著「文学の近代的研究」の、本多顯彰氏による訳出刊行は、昭和七年一一月一五日になされ、昭和一〇年一月一五日には、すでに第四刷が発行された。訳書は菊判六〇九ページ（本文）にも及ぶ大冊で、「文学の近代的研究」という書名には、「文学の理論及び解釈の序論」という副題もつけられている。

同じく右の回想において示された、芦田正喜氏の訳出というのは、その訳著「芸術鑑賞論」（大正14年1月15日、広文堂刊）（四六版三三四ページ）に収録されている。この訳著は、もともと、サンタヤナ George Santayana (1863—1952) の「芸術に於ける理性」(Reason in art) から抄出したものであって、モウルトンのものの訳出は、その付録となっているのである。「文学の近代的研究」から、「芸術の概念とその機能」（本多訳、第四篇文学批評、第十一章、思索的批評——詩の基礎的概念と職能、一以下）が訳出されている。

右に引用した回想によって、垣内先生のモウルトンに対する立場・態度などをうかがうことができる。若い人たちから、モウルトン教授と呼ばれたという「微苦笑」に、モウルトンへの傾倒・耽溺ぶりとその批判的扱いに対する反応ぶりとが微妙に写し出されている。

また、垣内先生は、モウルトンの所説との交渉について、その著「言語形象性を語る」（昭和15年2月11日、国語文化研究所刊）に、つぎのように述べていられる。

「よく人は、形象理論は内容と形式との綜合であり、その弁証論的発展であるという様に言われることもあるが、一応それにちがいない。そして他からは、外面的にそう言われないこともないが、内面的にはそうした抽象的な推論で片づけられはしない。物を見、考え、作る、具体的現実からは、多分に其の成立を異にするものである。それと同時に、もう一つ思い出される重要な事柄は、古人の残した、作品を見ると、そこには、単に内容と形式というものでは説明しきれない、素材から脱化して磨きをかけた光彩が示現せられるということに心づくようになると、その根源は何であるかということを知ろうとする要求が、明治の末期から大正の初めにかけて一層強くなったように思う。それであるから、そうした内面に潜んでいる秘奥を明かに知りたいという要求が一層この研究に拍車をかけさせた。そういう不満な要求には、刀鍛冶の弟子が師匠の手伝をしながら、ふとその湯加減を見た一刹那に鮑を斬り落されたというような危険が伴わないとは言われない。その頃、形象の問題を理論的に考察する進みが一頓挫した状況を今もまざまざと思い起すことが出来る。

その困難な問題に遭遇したのは、研究の中心点から離れて、当時の精神諸科学の方向へ逸れたことで、言わば底の知れない沼池に捨石を放り込むという様な果てし無い仕事に数年がたったように思う。これについて少し書き加えて置きたいのは、エヤマーチンガーの

『文芸哲学』に依ると、その頃、リッカートやウヰンデルバンドの学説が現われて研究の転換が行われかかっていることが分る。その一般状況はわれわれにも感ぜられたが、言語学では早くからヴント学説を始め音声学、文法学等への見透しがついていたのに、文学の方面では、もう崩れかかった文献学の研究法しか持合せていなかった。英国風の修辞学や文学評論の方はよく知られて居たが、それさえ美学の進展と共に微力となっていた。その頃、モールトンの『文学の近代的研究』を手にしたのであって、いち速くその論旨を紹介し、或は批判を試みたのであったが、文学の研究としては過渡的な考え方であるという様なことが当時の所見であった。数年前にその翻訳が現われたから今では周く知られている。そこで、文学形態学と形象理論との関係は、後には言語形象性の一層に収めたが、それより以前から文献学研究法に根拠をもっている形象理論の整理が、俄に目前に必要となった。形象理論を整えるまでの、初期の状態は大体こんなことであったように思う。註1（一二・一・一四）

文学形態学を手にしたのは大正四年であった。其頃までは、文学作品を韻文・散文に二大別して、その特性を解説するのが一般の情勢であった。形態学は先ずその雄然とした考え方を根底から打ち砕いたものである。この考え方は今でも反省せられないで、例えば小学国語読本の教材の研究という様な場合にも、そうした目標によって行われて居るのを見うけるが、韻律形態の有無を以て文学作品を分つのは理由のないことであると見るのであった。又、文学作品を抒情詩・叙事詩・劇と分つことは常識となって居たが、それはギリシャ時代という古代の、又ギリシャという社会の文学分類の仕方であって、それを現代に於ても、又あらゆる民族文学にも適用するのは不合理であると見るのであった。これに評論の一項を加えるのが、其の当時から今日に至るまで、我が国の文学概論の定型として考えられて居る。然るに形態学は、そうした伝統的な考えをとらないで、先ず文学世界の鳥瞰図を描き、文学作品群の在り方、その相互関係を整序することを、その目標とするのであった。これだけの事を見ても、その当時の、また現在に至るまで引続いて居る文学の研究の根本的革新を示唆する考え方であったことは言うまでもない。

この基準から観ると、我が国の文学に関する研究は殆んど文学地図さえもっていない情態にあったから、はか〳〵しく進めない。故にそれは直ちにその批判と見てもよいほどであった。それで、大正四年以後の数年間はこうした立場から、日本文学の理論的、展更的考察を整理することが、当面の主要な課題であった。しかし、前に述べた如く、それは自分の問題とは別のものであるから、これに対して、内心の抗争を抑止することの出来ないものがあった。国学院大学がまだ神田にあった頃、そうした所感を講演した簡単な記録があったが、今、手もとにないから、正確に述べることは出来ない。唯、今から思い出して見ると、自分の属する学界の現状に不満であり、外来の学説を統合するほどの定見もなく、徒らに焦躁の数年が過ぎたように思う。孤立の状況が目立って来たのも、この頃からである。

文学形態学ではどう考えて見ても、外面的であるから、それに対する内面的な世界が対立しなければならない。更に、その外面的・内面的聯関は何であるかという問題ももっと突きつめなければならない。然るにそれこそ、自分にとっては、早くから疑問として居る問題であるから、この説明に当らなくてはならなかった。文学形態

学の理論的基礎の他の一つは『展開』の概念であるが、それは『世界文学』という観点から、文学現象に於ける進化の跡を明かにしようとするのであって、その立場として、実証主義的解明の方法を採るのが、物足らぬところがあった。即ち理論的に、歴史的に、内面に鬱屈して居る疑問と一致しないものがあった。しかも、その頃は、当時の精神科学の勃興の気運の中にあり、且つ時代の徴候としての思潮の激動もあった。保守と進歩、理想と現実等々の相剋の渦中に踏み込んで居たのであったから、文学形態学にも、心理学的美学にも、文学論その他にも追随することはできなかった。こうした内面に於ける苦悩が、外面に露出するに至っては、決して今日から見て正当とは思われない。今思い出しても、内心の苦痛をさえ感ずるのである。唯、その心事が、寸毫といえども私心を含んでいないことは明治時代の先進の感化に依るところである。その頃が恰も明治以来建設された学問に於ける境界線をなしているかと思う。良識と知性と技術との交錯がもみくちゃにされるようになった。おそらく、その当時の学界に生きた何人でもこうした問題に悩まされたのであるが、自分としては、自分の課題に於て、自分の考え方の上に深刻さを加重しなければならなかった。

文学形態学が大体に英米の学風であるとすれば、それよりはドイツ学風というべき方向が早くから自分を捉えて居た。精神科学の思潮が我が国の思想界に導入されたのは、あたかもその頃であって、リッカート、ヴィンデルバンド等の学説は明治四十年代には、既に周く知られて居たように思う。その趨勢が直接にドイツ文献学に影響を及ぼして、大なる衝動を感じさしたのも、その当時である。その詳細は分らなかったが、それに関りなくそれが自分の心を強く刺戟したものであることは言うまでもない。元来その問題には、早くから関心をもっていたのであって、しかも相当長く持続して居たのであるから、当然この方面に向って深入しないわけにはいかなかった。そこで直接の問題としては、文学の外面的・内面的研究の中間の見透しを、この方面と結びつけて考えることであるが、それが精神科学的考察として、自分の目前に迫って来れば来るほど、身心共にいたく衰え、それを打開しなければならない促迫を感ずるほど、焦るだけであって、手を下すことができなくなってしまった。

勿論、この課題は、後になって見ると、既にディールタイ及びその学派の人によって取り上げられている問題であったのであるが、その事についても、その当時は全く知らなかった。それは後に大正末期から昭和初期まで、周囲からの排撃を避け、外界との関係を断ち、或意味に於て、自ら五年間の謹慎を自分に命じて、書斎に閉じこもった頃、それ等の書物を読み耽った時に、初めてその当時に於ける同じ問題が全く未知の領域に於て考察せられて居たことを知ったのであるが、この当時に於て、解釈学の成立も、芸術史、文学史の目ざましい進出も、文学理論の清新な考察をも、全く知らなかったということは、今に於てかえすがえす遺憾に思って居る。少くとも、この当時に於ては、この疑問を抱いて、自分を深く掘り穿つという一手のほか、手のつけようがなかったのである。立っても居てもたまらないような促迫を感じて、海外へ旅する心持が浮んで来たのもその頃であったと思う。その頃は、モールトンは既にシカゴ大学を退職して、その消息は明らかでない頃でもあったし、又ヨーロッパは世界大戦のさ中であって、学界の動静についても、これを知ることが出来なかったが、精神科学、精神史、文化史というような

課題に就いて、多年持続した研究を補強するため、世界大戦直後に、海外へ旅立った。」注2（「言語形象性を語る」、二〇～二九ページ）

右には、垣内先生がモウルトンの「文学の近代的研究」を入手し、研究し、紹介し、批判された当時の学界の情況が述べられている。大正四年（一九一五）に入手されて、大正八年（一九一九）欧洲に出張されるまでの、垣内先生の学問上の苦悩も端的に述べられている。

垣内先生みずから、モウルトンの所説との交渉・関連について述べられるところは、以上に見たとおりである。以下には、垣内先生と親しかった人や先生に教えを受けた人々の述べるところを中心に、垣内先生とモウルトンとの関連を見ていきたい。

まず、田部重治氏は、明治末年から大正一〇年代にかけての当時の状況について、つぎのように回想されている。

「明治四十五年の四月から私は東洋大学に一週に二時間教えることになった。或日、教授室の火鉢のめぐりにいると、外に二人の先生が同じ火鉢のめぐりにいて石坂養平の『文学と哲学との間』（多分、『帝国文学』に公にされたと思う）のことについて話しているのをきいた。一人は得能文先生で、私の郷里の大先輩、私は前からよく知っていた。先生は私をもう一人の先生に紹介されたが、それが思いがけなくも、嘗て桜井天壇氏の家で見た面白い手紙の書き主である垣内松三君であった。一週に二時間しか教えない私が、垣内君と同じ日の同じ時間に出講したことが、私と垣内君とを結びつける大きな機縁となったわけである。それから私は垣内君と話す機会が多くなった計りか、一緒に飲む機会も多くなった。議論もよくやったが、私がよくペーターをもち出したことも忘れられない。

大正二年になって私の東洋大学の時間が多くなり、垣内君と接触する機会も、益々多くなった。

私がペーターの『ルネッサンス』の翻訳を公けにしたのは第一次世界戦争の始まった翌年、即ち大正四年の五月で、それに就いて忘れられないのは、この書物の中にペーターの用いていたカルチュア（Culture）は独逸語のKultur にあたり、今迄よく用いられて来た修養の意味とは異なっているので、何と訳してよいかに苦しみ、初めて教養という訳語を作り、土居君（引用者注、光知氏）や垣内君に相談して見た。両君ともそれがよかろうと云うことで思い切って用い出した。この言葉は私が初めて作ったと深く信じている。

垣内君と土居君とが知合いになったのは慥かに私を通じてだったと記憶している。しかしいつ頃であったか、はっきり覚えていない。土居君はその頃から日本文学に興味をもち出したことを私に話したので、私は、是非垣内君に会って見たらどうだと云ったことがある。その内に土居君のところから垣内君を訪ずれたと云う報告があり、その報告の中に垣内君に会った感激が述べられてあり、垣内君を日本文学の最も深い理解者と感じたと云うような言葉があったのを覚えている。

三人が知合になってから我々は相当ペーターの思想や当時流行していた新カント派哲学の思想を語り合ったが、垣内君から日本文学の新しい一つの研究書として五十嵐力氏の『国歌の胎生と発達』に対する賞讃の言葉があり、何かの序でに賀茂真淵と独逸のヴィンケルマンとの比較論も出たように覚えている。

不老閑から大正五年に出た年四回発行予定の『現代批判』は私と土居君とで発案し、稲垣末松、紀平正美、野上豊一郎、四宮憲三君

などに相談し、垣内君にも多分、相談したように覚えている。このあたりのことについての私の記憶は可なりぼやけていた。しかし不老閣と垣内君とを結びつけたのは私に相違ないことだけは慥かである。その結果として、垣内君の随筆『石叫ばむ』が大正八年に不老閣から発行されるに至った。（中略）

得能文先生、垣内君及び私の三人が、東洋大学に文化学科を創設したのは、大正十年の四月で、垣内君が欧洲を遊歴したあとのことではなかったかと思う。この学科は文学と哲学、それに法律経済などを加味して実際社会に有為な人間を養成する機関で、三年間に修業するものであった。学科を編成する際、垣内君は欧洲の傾向から見て将来司書学の有望なことを説いて、それを入れることを主張し、遂にその案が採用されるに至った。この学科は数年にして入学者が減少したため廃止されるに至ったが、その卒業生が今や東洋大学の中堅となって働いている現状を考える時、それが大きな存在の意義をもっていたことを痛感するのである。

垣内君が東洋大学を去ったのははっきり覚えていないが未だ昭和にならぬ大正十幾年かのことだったと思う。しかし私とは個人的に交際していた。」（雑誌「実践国語」第一三巻第一四七号、昭和27年11月1日、穂波出版社刊、「垣内松三君の想い出」、六八～七〇ページ）

この田部重治氏の回想には、モウルトンのことは出てこないが、垣内先生がモウルトンの「文学の近代的研究」を入手され、考察されていた同じ時期の側面は、よくうかがえる。垣内先生の学問研究の環境の一面もうかがえるように思う。

垣内先生がモウルトンの「文学の近代的研究」を大正四年に入手されてからの、モウルトンの考察・紹介・批判をこめた講義の状況については、その受講者としての西尾実・斎藤清衛両博士の回想によって、すでにその一部を知ることができた。注3

また、久松潜一博士は、「垣内先生のことなど」という回想において、「『国語の力』ははじめ国語解釈を主とした十二巻の国語学習叢書の総論として書かれたようであるが、この一巻だけで後は出なかった。しかし『国語の力』は先生の日本文学研究と国語研究と国語教育との三方面の基底をなして居た。これを文学研究の上から見るとエルツェ等の独逸文献学的方法に加うるにモウルトンの『文学の近代的研究』その他が多くとり入れられ更にデルタイの解釈学的方法も加えられたように思われた。終りの章をなす国文学体系は解釈学的立場から出た文学研究の方法、体系の素描であったと言い得る。そうして日本文学史をば『日本文学の思潮』と『日本文学の形象』というこの点から把握しようとされた。この場合の思潮も日本文学に現れた思潮よりは日本文学そのものの思潮であったと思われるが、形象も形式よりは内容と形式との一体となった姿であり、『さま』であった。このような形象を中心とする見解はそれ以後の垣内学説の中心をなしたと思われる。」（雑誌「国語と国文学」、第三四三号、第二九巻第一一号、昭和27年11号、五三ページ）と述べ、また「『国語と国文学』の創刊に当っては『文学反響』という論文を書かれた。これはモールトン教授の『文学の近代的研究』にあるそれにもとづいて発展させられて居るが、文学の反響という語も好んで用いられた語であった。それに必ずしも影響されたというわけでもないが私も近く『文学の反響』という一文を書いた。垣内先生の学説はそれ自身すぐれて居るが、その反響という点に於ても大

きなものがある。国語教育界に於ける反響は言うまでもない。」（同上誌、五四ページ）と述べられている。

さて、欧洲留学から帰られて、垣内先生がなさった講義はどのようなものであったか。東京高師にあって、その講義を聴講された、石森延男氏は、つぎのように述べていられる。「わたしがはじめて先生の教えを受けた大正十年の春から、亡くなられる昭和二十七年の夏まで、一貫して迫るものは、先生の『生きることの厳しさ』の一語につきる。」「先生が欧洲留学をおえて、初めて講義された教室に、わたしは幸にも座っていた。『日本文学史』と『文学概論』との学問を二カ年間つづけてお聴きすることができた。そのころ老眼鏡をかけたばかりで、先生は、かけてははずし、はずしてはかけして、きらりきらり光るものを発散させながらで淡々と講ぜられた。青くさいそのころの学生たちには、理解できるものではなかったが、わたしは、しがみついて聴きつづけた。

低く垂れこめた雲に蔽われていたわたしの頭脳が、しばらくしてどこかに、一点の青い空をみつけた。青い空は、少しずつひろがっていった。わたしはそれまで、文学には反逆児であった。とくに国文学には失望をし、軽蔑さえしていた一人である。芸術は音楽だけのように、信じきっており、どうかするとそちらに脱出しようともがいていた。しかし、わたしは手綱でぐっと首をひきもどされた。わが国の文学への眼が開かれた。忘れることのできない熱をおびた講義主題は、次々とわたしを魅了したからである。日本文学史における——合唱・抒情詩・物のあわれ・自然と奔放・遠白き道・叙事文学の三面・俳諧・分裂と統一・宗祇など。文学概論における——文学の本質・創作と批評・直観即表現・芸術家の任務・シラーの芸術観・芸術と生活・芸術品と社会との関係・文学形象の起点など——いまだに記憶の幕に匂っているのは、先生が文学の『真実性』を語った時である。これでも、文学に真実性はないというのかと、二たび、三たび教卓を打んばかりに頬を紅潮された。あの講義の一齣である。

『文学の本質に内在する真実性に関しては、人生との交渉の上に精密なる考察をほどこさなくてはならない。この問題をさらに縮めると作者の人格の内面における作用において観察しなければならない。なんとなれば、文学すなわち芸術の世界は、人格的統一の上に立つ個性的具体的なものであるからである。その立場において文学の当為について考えることが文学の正しい理解に導く出発点でなければならぬと思う。換言すれば、作者の直観の検討においての問題が解決されると思う。アーノルドのことばに「文学は人生の批評原理である」というのがある。その意味は文学の研究はそのあるがままに人生の姿を見る力であるということである。これは文学研究の一時期を作った考えであるが、さらにこのことばを分析して考えてみると、如実にものを見るということは、科学の機能にして、観察分析とによってますます微細な専門をつくるのである。かくのごとき人は、アーノルドの人生ということばによって示されるものと両立し得ない。人生が科学的の研究をほどこされた時には、たとえば社会学でも、心理学でも、生理学でも、人生の分解された断片が明晰に考究されるのであるが、人生ということばによってつらぬこうとする作用は、この中からは起ってこない。人生および人生の研究は全一であり、総合であらねばならぬ。

人生をみるという時にも、その意味はけっして特殊的・分析的な

ものではなく、もっと霊話的人生の意味なのである。特殊の知識的研究は全一の姿において人生をみるという可能性はない。ただ文学においてのみかくのごとき作用をふくみ得ると解釈しなければならない。かかる意味における文学は、はたして真実性を欠くものであろうか。人生の研究と称する学問は人文科学である。生理学で研究することは人生の広い一面にすぎない。しかしその中に人生ありやいなや疑問である。神経の末梢まで研究しても生命はない。人生の内面を研究するとき、科学的に研究されてもその極限は見えない。また、同じ理論を比喩的にモールトンがいっている、「文学と科学との関係はあたかも祖国と植民地の関係である」と。文学は祖国、植民地を開拓していく時に、その母国として領地を支配する。科学は母国をはなれて開拓の領分を広めていくが、その拡大にかかわらず祖国はつねに全一地点にあって母国の精神の上に立っている。このように文学も人生の祖国として永劫不変にその立場を失わない。科学は特殊化され専門化されて、その末梢にいたってかえって母国とはなれた領地が形成されるのである。アーノルドのいうところとモールトンのいうところとその叙述において異っているが、その帰趨においては一である。文学の本質は、その特殊化されたものではなく、それらの全体の統一である結果なのである。これを作者の創作態度にもってくるならば、もっとも自由なる人格的統一の作用であるといい得る。すなわちその内容はなんら限定されない自由なる立場に立ってあらゆる作用を統一せんとする作用である。外に分析するのではなくして、どこまでも内にかえって統一を求め統一を創造していくのである。科学は分裂していくが、文学は内にすべての経験内容を統一していくのである。自我の最高統一が意志であり、意志が物自体と接触するがごとく、文学においては自我の最高統一として人格的統一の上に立って、それが統一であればあるほどこの自体と面接するのであって、その自由なる立場において人生は客観的芸術的世界に統率せられるのである。かくのごとき立場から生ずる表現が果して真実性がないのだろうか。芸術は概念をはなれるほど超経験であるほどその本質を発揮するのである。外に向かって作用せずして内に向って作用する反省的機能の上に、あるいはシェークスピア的戦標を感じ、あるいは超人的精神が美化される。われわれの経験において喜怒哀楽の醜悪なる場面も、情緒も、この作用によって浄化され、美化され、芸術化される。その差が生ずるところは、概念と混ずるかいなかにかかっている。科学と芸術の問題は全く逆であって、しかもその中にかえっていく統一の上に、さらにあらゆるものの姿を正しく見せる力を含んでいる。かくのごとき意味において文学の本質は真実性を欠くといい得るだろうか。以上のいろいろな立場から文学の本質を観察する時に、もう一つ自分にかえって反省を要するのは、真理といい、真実性というのは、認識対象界をもって唯一の実在界とするところの主智主義のために溺らされている偏見ではないかということである。論理範疇にあてはまらない感情的対象界を実在界とみる事ができないというような束縛をうけていることである。一般性客観性というものは、つねに論理的に範疇にあてはまるところのある体系のみをさしているのではあるまいか。もしそれを真理・真実性というならば、文学の本質に内在する真実性はそれではない。かえって時間・空間・因果の束縛を脱して個人的で主観的である精神の内面で、内にはいっていくときにそこに展開する先験的立場において是認される真理もしくは真実性

をいうことになる。論理的範疇を超越したわれらの人格の中に見出される無限の豊富な先験的感情の世界に見出される心の動き方をいうのである。これは科学によって究明されるものではなく、ただ芸術の中にのみ輝いているものなのである。

知識によって生きる者には理解することのできない作用で、ただ芸術を見ぬこうとする直観の力にのみによって見出される真理・実在性である。この立場に立って人生を見る時にその人格的内面の所産は自ら表現を呼び起して人生の批評原理と創造との結合点において芸術ないし文学が表われてくる。これを理想化などということばを用いていうが、むしろ人生のもっとも尊い正しい理解であるということが、この場合に似つかわしい。文学における自然および人生のとり扱い方は、ただそれを論究することをもって終るのではなくして、同時にその中から新しい性格と文化とを創するのであって、その文学的境地は、批評原理と創造とを融合した点に存するのであって、文学は個性的統一の作用によって混沌を克服し、雑多を統一して、それが終ると同時に創造が行われている。この意味において科学の自然および人生に対する態度と内面的に大いに距離がある。たとえば自然の描写あるいは説明において、ラスキンが近代画家の描いた作品は、近代英国人に自然の見方を教えたものだと云っているが、科学的に自然を説明したことではない。たとえば、黎明のものさみしさ、何ものかを示す風の音、あるいは、憂鬱な大洋——という時に、その自然にあらずして、ある形容詞は、その自然の真相を示すものにして、それによってもっともよく自然の姿がわかるのである。そのようなことばを選び出したラスキンの態度は、決して科学的なものにあらずして、驚異の眼に反映した自然そのものの生命であり、人格的情緒によって彩った自然である。かくのごときことばの内容が科学的であるというゆえをもって、その価値を減じないで、かえってかくのごとき直観が科学以上に精確であるということが感ぜられている。そのような場に、このような態度が、はたして錯誤であり、幻覚といい得るだろうか。かくのごとき意味において文学のとる態度は科学に比較して、いっそう高級なる理解といっていい。作品がわれらにかく見よとさし示すものは、科学の指示するものよりも更に真である。もう一つ文学に対する批難は全く個人的理想家で、すべての人に普遍的真理ではないという批難である。もとより個人的人格的統一であるから、おのずから個人的特殊的といい得るのであるが、そのことが何がゆえに普遍でないといい得るか、シェークスピアがリヤ王によって千万人の心を一にしたという時に、個人的人格的統一はただちに千万人の心であり、文学が永遠性をもっていることは、この千万人の心の内に個性が生きるからであらねばならぬ。理論的にいえば、個人的であるけれどもすべての人に通じる精神的可能性をもっている。しかもその可能性たるやその作品によって、すべての人の心を蘇生せしめ力づける。もとよりそれがために全く異ったものに変化させる作用は持たないとしても、それらの人々の持前の方則によってそれに力を得て、勢づけられて、個人の心の世界において永遠に展開していくのである。換言すれば個性的統一の内面において内存する勤力が千万人を勤かして無限に展開するのである。その扱い方は特殊的・部分的であるが、そのとり扱った問題は、人生の一面であるということは、かくのごとき力を内存せしむる理由でなければならぬ。もしただの説明にすぎないならば、ただちに消滅し去るのであるが、それを表現したが

ために、その内面的の動力によってすべての思索よりももっと生き生きと人心に生きている。かかる文学に真実性はないといわれるのであろうか。すなわち文学作品に表われている普遍性永遠性は、一面において同様に動力をもっているところの人生の説明と、いかなる交渉があるかということは、すぐ起きる疑問である。この解釈のためにもっとも文学に近く、しかも理智に富んでいる諷刺というものを考えてみよう。これは主として人生の悪徳を表述するのであるが、その本質は眼前の問題に対して正しい、あるいは鋭い感じをもたらすのである。しかしその最後の影響はこれに対して人生の内容にひそむ暗黒に対する罪をあがない、法悦、祈禱という考えが持されない。

この二つの相違はその内面にたとえ同じ醜悪面があっても、これにかかわらず、予言者的精神が人の心を高めるか否かということにかかっている。文学の本質は、ただ当然の問題を理解せしむるのみならず、深刻に個性を刺戟して、あるものを示唆する。その意味において哲学と宗教に合致する。ただ文学の特殊な点は示唆する法式が、宗教哲学と違って、具体的な人生若しくは生活を眼前にさし示して、これをよく眼前にさし示す違いがある。』

三度も四度も、波が押しよせてくるような、先生の気迫を感じないでいられない。

こんなふうに、のべつまくなしに文字にしてしまえば、もはや熱を帯びた先生の音声を離れてしまい、読む人には、さほどの感銘はないと思うが、わたしの頭の中のテープレコーダーは、少しも色あせてはいない。」（雑誌「実践国語」第一三巻第一四七号、昭和27年11月1日、穂波出版社刊、一六～一九ページ）

この回想によって、垣内先生の帰朝後の講義状況がわかる。それはまた、「国語の力」成立直前の講義状況でもあった。（なお、垣内先生の講義ぶり、話しぶりについては、井上趣氏が、つぎのように述べられている。「大学で講義される場合には、先生もノートを作って、そのノートを逐語的に見ながら話を進めていかれた。だからそのころは難解ということのほかには、先生の言語表現に対し不思議を感じなかったが、十数年後先生が各地で行なわれた講演を聞くに及んで、私は先生の言語能力の異常に驚いた。一時間でも二時間でも、先生の話には切れ目がない。文字通り植板に水であり、とうとうと流れる川水である。もちろん手にノートもメモさえも持っていられるわけではない。主格述語修飾語の位置、一つ一つの文の構成は実に整然としている。そして長くつづく話のどこにも、一回の言い直しも訂正もない。語彙はきわめて豊富であり、言い回わしに変化がある。しかも表現内容は抽象理論的で具体例もほとんどない。時々烈しい表現はあるが、決してハッタリもなければヨタもない。こうなってくると先生の言語表現は、先生独得であり、むしろ先天性と断じるほかはない。その難解は、単なるドイツ翻訳語の詰屈さにあるわけでなく、示唆・暗示・滋味の宝石と共に先生の独壇場なのである。と私は思わざるを得なかった。」（雑誌「実践国語」第一三巻第一四七号、七八ページ）この記述から、垣内先生の話風の一端をしのぶことができよう。）

さらに、帰朝後の垣内先生の講義聴講の回想としては、諸氏によってつぎのようになされている。

1　谷　鼎――「高師で先生から御教授を頂いたものは私どもが最初ではなかったかと思う。たしか大正八年の四月、当時、国漢科の本科二年になったばかりの我々が、文学概論と文学史とを教えて頂いたと記憶している。モウルトンの文学史が中心になっていたよ

うに思い出す。文学概論の御講義中に屢々茶道の話が出て来たが、その大要は、それ以前の先生の御著書の『石叫ばむ』？に載っていることを発見してうれしがったことも思い出す。」（雑誌「国語教室」、第四巻第一号、昭和13年1月号、二二ページ）

2　池田亀鑑――「垣内先生が東京高師に来られて、日本文学史と文学概論とを講じられることになった時、その最初の御講義から聴講する名誉を得たのは、私共と私共の一年前のクラスとであったように記憶する。あれから二十年近くにもなるが、その時先生の御風格や学風から受けた感銘は、今日でもなお忘れることの出来ないものである。

その当時、私共の周囲に見られた国文学界の状態は古風な訓詁註釈的な学風から、まだいくらも進んだものではなかった。勿論それは出来るだけ多くの古典を読むということを重視した高師という学校の性質上止むを得ないことであったし、また私共自身も読むこと以上に確実な、正当な、文学研究の如何なる基礎も存在し得ないことを承知していたけれど、それにもかかわらず、私共は、私共の周囲にあるそういう古風な学風に対して、何とはなしに漠然たる不満の感じを抱かずにいられなかったのである。

その不満というのは読むということそれ自体が、果して単に古文中の難解な語句を辞書によって現在語に置き換えることでよいのであろうか、文学そのものの不可思議な本質を理解する道が、そういう機械的手段で尽されるであろうか、国文学の研究は箇々の古典的作品を単に読破するということだけでよいのであろうか、国文学が学として確立するためには、どういう体系と組織が望まれるべきであろうかというような方法論上の疑問であった。

そういう不安と動揺のさ中に、垣内先生を新しく講壇に迎えた私共の驚異と歓喜は、それこそ言語に絶するものであった。その頃、先生は主としてモウルトンの文学論を中心として、ヴントや、コーヘンや、クローチェや、ディルタイなどの諸説を取捨しつつ、国文学方法論の根本問題から説き起された。これまで国文の講義に、外国人の学説の引用などを耳にしたことのない私共は、先生の示唆に富んだ新鮮な深く広い学識とそれ自身ほとんど詩といってもよいほどに洗練された美しい表現とに、全く度胆をぬかされた。と同時に、はじめて、久しい間求めてしかも求め得ずにいたものを得た喜びに恍惚としたのである。

先生の国文学史は、日本文化の自叙伝若しくは日本精神史としての立場から講ぜられたものであった。文学概論は、日本文学の本質論、云いかえれば国境を越える文芸精神の照明の下に眺められた日本的性格についての論究が中心となっていたように思う。先生は、この二つの題目に於て、ある時は文学の理会の手段としての直観について、ある時は解釈の機構について、ある時は文芸の自律性について、ある時は各時代の文学の理念について、ある時は形態論や様式論について、ある時は国文学の方法体系について等々、様々な角度から研究の部門や領域の存することを示され、かつこれ等に関して数々の有益なる暗示を与えられた。」

（雑誌「コトバ」第八巻第一号、昭和一三年一・二月合併号、一二七～一二八ページ）（1・2につづくこの項、未完。）

注1　昭和12年1月4日、垣内先生が口述された日付である。

注2　この部分の引用は、すでに、小稿「成立過程Ⅰ」にも、中略をしつつ、一部を引用している。

注3　小稿「成立過程Ⅰ」に、引用した。

（昭和37年5月24日稿）

（本学助教授）